



受験一辺倒に縛られず好きなことをやって栃高時代を過ごした菅沼（左）と小林（右）＝東京・銀座のリクルートのギャラリー「ガーディアン・ガーデン」

青春スクロール

母校群像記

縛られず熱中 多方面で異彩放つ

「スリーハンドレッドクラブ」と言えば、1962年に東急電鉄が神奈川県茅ヶ崎市につくった名門ゴルフコースだ。栃木高校（以下、栃高）のOBで同名のクラブを「自称」しているのがリクルートホールディングスのフランニングディレクター菅沼比呂志（51、1982年卒）とスマイルコネクト・イー代表取締役の小林康秀（50、82年卒）。クラブの名前の由来は「学校の科目の成績が300番台だったから」。



栃木高校 ⑧

菅沼は陸上部。110メートルハードルを走った。2年の時に先生から「クラブ活動をやっている場合ではないだろ」と言われた。それでも国体が終わるまではと練習に励んだ。陸上部の顧問は箱根駅伝の経験もある鈴木良弘（61）。小山市職員時代に東海大からスカウトされた実力者。「鈴木先生は選手のモチベーションを引っ張り出すのがうまくて、理にかなった練習をしていた」と振り返る。今はリクルートが持つ銀座のギャラリーを、第一線で活躍するクリエイターへの開放の場として切り盛りしている。

小林は群馬県板倉町から通学、クラブには所属しなかった。バラエティー番組でおなじみの心理アナリスト、垂門虹彦（52、80年卒）は演劇部だった。栃木女子高の生徒と合同稽古を兼ねた。さらに2年生の時に演劇仲間と作った

た。「落ちこぼれていたことしか記憶にない」。中学校の時から教師志望だったが、社会勉強が先だとセガ・エンタープライゼスへ。その後ソニー・コンピュータエンタテインメントで「みんなのGOLF」を開発する。2011年に教育や健康に関するソフト開発会社スマイルコネクト・イーを創立。エンタテインメントを通じて教育に関わっている。



垂門が経営する昭和時代の喫茶店にはつげ義春の漫画が掲げられている

大橋のオフィスにはバリ島のジャングルの音が絶え間なく流れている



のが茶道同好会。保健室の先生が茶道をやっていると聞きだし、「僕たちにお茶を教えてください」と頼み倒した。理由は「近くの女子高生と交流がしたかった」。同時に演劇も続けた。三島由紀夫とも親交があった劇作家矢代静一などの戯曲を披露した記憶がある。文化祭ではガラス越しに栃女生とキスをするような役回りをやるなど、高校生活を満喫した。「今考えるに恥ずかしいことをしていた」と思い出し笑いをする。心理テストや夢分析などで人間の深層心理を診断して

人気を博している。



1991年、沖縄大学教授時代の宇井。この年に国連環境計画の「グローバル500賞」を受賞

その中でも最も印象深い同級生が公害研究の第一人者で沖縄大学名誉教授だった宇井純（故人、51年卒）。足洗い場で宇井に「お前、何やってんの」と声を掛けられたのが出会い。それから交流はすっ

文明科学研究所所長の大橋力（81、51年卒）は現役の科学者であり芸術家。別名、山城祥二。芸能山城組の創設者で、同名で映画「AKIR」の作曲も手がけている。小学生の頃から顕微鏡をのぞいていたこともあり、生物クラブに所属。前にこの欄で紹介した日本画家の塚原哲夫（故人、51年卒）と同級生。小山市から一緒に通学して仲良くなった。ロッキード事件の一審で裁判長を務めた半谷恭一（故人、51年卒）も同級生。

大橋はある種の音が人間の脳だけでなく身体にも心地よさをもたらす現象を「ハイパーソニック・エフェクト」と名付け、今も専門誌「科学」などに論文を書くなど旺盛な執筆活動を続けている。（敬称略）

大橋の多くの著書の中でも「音と文明—音の環境学とはじめ—」（岩波書店）は力作だ。この本は「編集者が選ぶ百年後も読み継がれる岩波の本」の6冊の中の1冊に選ばれている。鈴木の「スマイルコネクト・イー」は<http://www.sc-e.jp/>で概要を知ることができる。栃木高校の情報は utsunomiya@asahi.com まで。